

# 情報メディアリード型地域活性化 マイナスのインパクトに関する一考察

About the occurrence which happens when information media promote regional vitalization

田畑 恒平\*

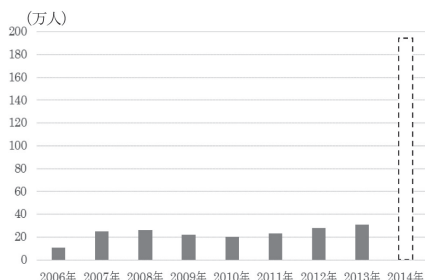
## 要 旨

2014年群馬県富岡市にある日本の殖産興業の代名詞とも言える「富岡製糸場と絹産業遺産群」<sup>(1)</sup>が、UNESCOの世界遺産<sup>(2)</sup>に正式に登録された。この情報は瞬く間にメディアに載り人々に知れ渡ることになったのである。その結果、富岡製糸場には予想をはるかに超える観光客が押し寄せ、富岡市<sup>(3)</sup>の中心地区は空前の観光ブームに沸いている。こうした中で、その土地に代々暮らし、未だに絹産業に従事しながら生活している人々もいる。また、これを機に転換を図り観光を中心とした産業へと転換する人々も存在している。念願の世界遺産登録が地域活性化に果たす役割として大きな果実を得た反面、そこに暮らす人々の生活や産業への影響、また劇薬ともいべきメディアによる地域活性化の功罪について検討する。

**キーワード：**情報メディア、地域活性化、まちづくり、人材育成

## 1. 背 景

2014年6月21日の第38回世界遺産委員会において、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産が正式登録されたことは記憶に新しい。それにともない富岡製糸場には連日多くの観光客が押しかけている。図1は富岡製糸場の来場客数の推移と予測である。



出典：富岡市発表資料及び2014/10/23朝日新聞記事より 筆者推計

図1. 富岡製糸場来場客数の推移と予測

2014年10月23日付朝日新聞によると、4月から半年たった9月の時点で富岡製糸場の来場者数は、70万人を突破しており、このままの来場客数を維持して本年度は推移すると仮定すると、およそ194万人近くの来場者数が見込まれると予想可能である。

そもそも、富岡製糸場への来場者数の推移は、2007年の「世界遺産暫定リスト記載」を機におよそ2倍に膨らんでおり、以降およそ20万人前後の数字で推移してきた経緯がある。そして、2012年の日本政府によるユネスコへの世界遺産登録推薦を経て、2013年には30万人規模へと来場者数が伸びている。このように、世界遺産登録関連の様々な出来事を契機に順調に来場者数自体の伸びを確保してきており、その観光客が消費する多くの観光資金は地域の経済的な活性化に大きく寄与していることは疑う余地はない。

そうした明るい話題の陰で、情報拡散・話題性の破壊力によって富岡製糸場周辺地域では多くの課題が浮き彫りになってきていることも事実である。まず、富岡市そのものに目を向けてみると人口約6万人の市であり、主な産業は農業と精密機

2014年11月30日受付

\* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科非常勤講師  
社会学, 情報学

器の組立工場をはじめとした機械工業である。この街に世界遺産登録関連のイベントを契機におよそ10万人ずつ観光客が増加して押し寄せてきたのである。2007年からの前年プラス10万人の増加は、2012年までかけて行政と地域が一体となり駐車場の整備を始めとした各種ファクションの充実に取り組むことによって、吸収していくことができた。2013年の更なる10万人の増加は、この2007年～2012年までの取り組みと世界遺産への登録を見越した上での取り組みもあり、何とか吸収できている。しかし、2014年の異常な伸びは、富岡の地域社会が持つ機能性をはるかに凌ぐものであり、大きな歪みを生んでしまっている原因であると言わざるを得ない。

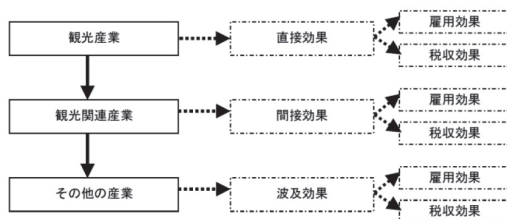
首都圏を中心とした近県には、温泉、歴史的遺産、スキーリゾートなどの観光資源により、首都圏という一大マーケットを背景に、従来から多数の観光客を集め発展・成長してきた地域が数多く存在している。しかし、これらの地域の中には、近年の高速交通網の発達による日帰り圏内化と、旅行の大衆化の中で主流を占めてきた団体客から、多様なニーズをもった個人・小規模グループ客を中心とした旅行スタイルへの変化、観光地間の競合関係の広域化などといった経済社会情勢の変化についていけず、観光客が減少し、まちの空洞化、施設の老朽化と相まって地域の活力が低下している、いわゆる従来型観光地が多くみられる。このような構造的な課題をかかえる従来型観光地が、その再生を目指し地域の個性を活かして、自立的に地域活性化に取り組むことは、観光交流を通じた観光地周辺地域の活性化を促すとともに、人々の余暇の充実や、個々の価値観に応じたライフスタイルの幅を広げることにもつながる。このため、観光庁や国土交通省をはじめとして、様々な官公庁、自治体レベルで「まちの魅力の再発見又は創出と、その魅力を活かした集客力の回復やまちの再構築の方策」について多くの調査・検討・提言がなされている。<sup>(4)</sup>しかし、多くが活性化することの光部分にフォーカスを当てており、実際に活性化する過程もしくは活性化後に起こる様々な課題について、想定・言及した上での地域活性

化策についての議論は薄いというのが現状である。

## 2. 先行研究と課題意識

情報メディアリード型の地域活性化について、メディアと観光地活性観点での先行研究は豊富であり、例えば、メディアが誘発する観光による地域活性化については、山田（2010）は次のように言及している。「観光旅行は冒険ではない。だから、行く先に何があるのかわからない旅をすることはないはずなのである。もちろん冒険の要素があれば観光旅行はより楽しいものになる。しかし、あらかじめどのような観光資源がそこにあるのかわからなければ、そもそも人々は旅行に出かけたいと思わない。よって、ガイドブックや紀行文はこうした欲求を人々に駆り立てるメディアとして作用しており、テレビドラマや映画がその役割の一旦を担っているのである。つまり、メディアが観光行動を誘発するわけである。」(pp.72)としている。さらに「映画やテレビドラマを利用して観光客を呼び込むということは、前述の観光客の行動原理からすると、潜在的な観光客に対して、そこに行きたいというニーズを持たせる強力なきっかけを仕掛けているということになり、合理的な手段であると言える。」(pp.73)ともしている。これらは主にマス・メディアに関する言及である。また、一方でソーシャルメディアの情報に起因する点について、川村（2011）によると「ここしばらくの傾向として、北海道へやってくる観光客の大半は個人旅行である。そのような観光客は、飛行機や列車を自分で予約し、レンタカーを利用して自分で移動する。従来型のパンフレットは情報が静的でリアルタイムな状況を反映していないので、あまり参考にはしない。インターネットやスマートフォンを駆使して旬な情報収集し、今経験できることを重視する。口コミサイトで情報収集し、地元の人が利用する飲食店でおいしいものを食べる。感想や写真はブログやFacebook, Twitterにアップし、すぐさま友人と共有する。」としている。<sup>(5)</sup>更に、財団法人電源地域振興センター（2006）の報告書によると、世界遺産登録に

よる観光を軸にした地域活性化の効果（図2）を以下のように整理・考察を加えている。



出典：平成18年度電源地域振興指導事業に係る「電源地域振興計画策定調査（鳥根県大田市）」報告書 pp.66

図2. 世界遺産登録による観光を軸にした地域活性化の効果

#### ●直接効果

- ・観光客が観光地域で観光消費（宿泊費、飲食費、土産品費、入場料、交通費など）することは、まず観光産業の収入になる。

#### ●間接効果

- ・この各観光産業の収入から利潤、賃金、税金などの付加価値を差し引いた残りの金額が原材料やサービスの購入に割り当てられる。この原材料やサービスの購入は、これを提供する観光関連産業（例えば、ホテルを顧客とするクリーニング業者、農産物の生産農家、看板・チラシ製作の企業等）の売り上げになる。

#### ●波及効果

- ・観光産業が、地域内のある産業から財やサービスを購入すると、それはその産業にとって売り上げ（需要）となる。さらに、今後もこの需要が見込まれるものとすれば、その産業は、これらの財やサービスの生産に必要な要素（原材料、人材等）をさらに他の産業から購入し生産することになる。このプロセスは、財やサービスの購入を通して、多くの他の産業にも波及していく。

#### ●雇用効果、税収効果

- ・上記の3つの効果からは、生産・消費活動から生まれる直接的な経済効果に加えて、生産増加に伴い雇用効果と、税収効果も生まれる。

これらは主に経済的な観点からの考察と捉えることができる。

これらの先行研究からもわかる通り、観光の観点で見た場合、メディアリード型の地域活性化は非常に有効な手段である点には言及されている。しかし、言い換えるならばこれらのメディアによってもたらされた観光誘客から続く地域活性化は、やはりその有効性を検証もしくは発現するための方法論を中心とした議論が中心であり、そのマイナスのインパクトについての言及はされにくいということであろう。確かに「地域」の視点で見た場合、現代の社会的な課題として顕在化していることは「少子化」「高齢化」「過疎化」であり、これらが生む「地域経済の停滞・減退」であろう。そして、調査研究の意義をとらえるならば、その社会的問題に対して問題を提起し、分析を加え、解決策を提示することは当然のことである。しかし、「三利あれば必ず三患有り」ではないが、多くのメリットと主にデメリットを考慮した上で、バランスの取れた地域活性化、地域に対する研究・提案が必要ではないかと考えている。

### 3. 課題の設定

こうした先行研究並びに研究の傾向を踏まえて、今回の研究課題は、メディアによる地域活性化がなされた地域を事例に挙げ、どのようなマイナスのインパクトが、どの程度の強さで発生しているか。それらの地域活性化への影響、地域の取り組みの現状を分析することによって、地域活性化を考える際に必要なマイナスの要因について言及する。

### 4. 考 察

#### 4.1. 研究対象

今回の研究調査対象地域は前述した「富岡製糸場と絹産業遺産群」のコアコンテンツである「富岡製糸場とその周辺地域」を対象とする。

対象とした理由として以下の点を挙げる。

- ① 世界遺産登録への決定に際して、事実として多くのメディア露出があった点においては疑問の余地がないと考えられるため。



- ② 筆者が行った2011年の調査段階においては、富岡製糸場を中心とした地域の課題は「いかに地域を活性化させるか」<sup>(6)</sup>であったため。
- ③ 首都圏から地理的に近く、観光面での動きが大きくなるのが容易に予想される。したがって、地域活性化における地理的な制約面でのバイアスがかかり難いと考えられるため。

#### 4.1.1. 富岡製糸場について

富岡製糸場は1872年、明治政府が日本の近代化のために最初に設置した模範器械製糸場である。江戸時代末期に鎖国政策を転換した日本は諸外国との貿易を開始。当時の最大の輸出品は生糸であったが、輸出の急増によって需要が高まった結果、質の悪い生糸が大量につくられる粗製濫造問題がおき、日本の生糸に対する評価が大きく損なわれることとなった。そこで、明治維新後、新政府は文明開化の号令の下、日本を諸外国と比肩できるようになるため、産業や科学技術の近代化の推進を企図。そのための資金を集める方法として、生糸の輸出が一番効果的という結論を導き出した。そこで政府は生糸の品質改善・生産向上と、技術指導者を育成するため、洋式の繰糸器械を備えた模範工場を作り、国策として良質な生糸の生産を推進、その原動力となることを期待された施設が富岡製糸場であった。

富岡製糸場は、殖産興業を推進するために国が建てた大規模な建造物群が現存する産業施設であり、繰糸場は長さ約140.4メートル、幅12.3メートル、高さ12.1メートルで、当時、世界最大規模であった。工場建設は1871年から始まり、1872年7月に完成、10月4日には歴史的な操業が開始された。繭を生糸にする繰糸工場には300人取りの繰糸器が置かれ、全国から集まった工女たちの手によって本格的な器械製糸が開始され、外国人技師の指導の下、高品質に重点を置いた生糸で海外でも好評を得た。器械製糸の普及と技術者育成という当初の目的が果たされた頃、官営工場の払い下げの主旨により、1893年に三井家に払い下げられ、その後、1902年には原合名会社に譲渡され、御法川式繰糸機による高品質生糸の

大量生産や、蚕種の統一などで注目された。昭和1938年には株式会社富岡製糸所として独立したが、1939年には日本最大の製糸会社であった片倉製糸紡績株式会社（現・片倉工業株式会社）に合併され、その後、戦中・戦後と長く製糸工場として操業を続けたが、生糸値段の低迷<sup>(6)</sup>などによって1987年3月に操業を停止し、その後も場内のほとんどの建物は原型のまま保存されている。



写真3. 富岡製糸場と現在の賑わい

群馬県、富岡市とその周辺の市町村を中心とした世界遺産登録への取り組みは2003年から本格化している。翌年の2004年にはボランティア団体「富岡製糸場世界遺産伝道師協会」<sup>(7)</sup>を発足し、講演活動等を通じて草の根的な活動を展開してきた。こうした取り組みを経て、2012年のユネスコへの推薦、2014年の登録へとつながってきたのである。登録に向けた地域の取り組みを以下のように時系列で整理する。

年	内容
2003年	富岡製糸場を世界遺産にする研究プロジェクトを開始（群馬県）
2004年	県庁内に「世界遺産推進室」設置（2009年度に「課」に変更）
2004年	富岡製糸場世界遺産伝道師協会」発足 ・ボランティア団体 ・世界遺産登録運動周知のための「世界遺産講演会・学習会」、「世界遺産解説活動」、「世界遺産普及体験活動」等を実施
2005年	富岡市に「富岡製糸場課」設置
2007年	文化庁が「富岡製糸場と絹産業遺産群」を世界遺産国内候補に選定
2007年	富岡製糸場見学有料化
2012年	国が「富岡製糸場と絹産業遺産群」を世界遺産候補として推薦することを了承 ユネスコへ推薦書（暫定版）を提出 ユネスコへ推薦書（正式版）を提出
2014年	世界遺産に登録

※群馬県 HP、富岡市 HP より筆者作成

図 5. 世界遺産登録に向けた取り組み

上記を見てもわかるように、およそ 10 年前から世界遺産登録にむけた取り組みは行政を中心に本格化しており、長年にわたる「登録に向けた」綿密な準備がなされてきたことが明らかであろう。

## 4.2. 富岡製糸場とその周辺地域の地域活性化の取り組み状況

### 4.2.1. 世界遺産登録以前の地域活性化の取り組み

富岡製糸場とその周辺地域（群馬県富岡市）の 2005 年に発表したまちづくり計画<sup>(8)</sup>によると「中心市街地は、そこに住む人はもちろん、周辺の人にとっても生活をする中で重要な意味を持つ場所である。そこに住む人は、そこで生活することが一つのステータスであり、周辺の人々は、自分達の日常にないものを求めて集まり、街へ行くことが楽しみの一つとなる。また、観光客などの来街者には、その街へ行きたい、また行ってみたいと思うような魅力が必要となる。富岡市の中心市街地には、富岡製糸場が 1872 年の創建当時の姿をとどめており、その富岡製糸場を活かしたまちづくりを進めることが魅力の創出につながる。」とあり、街の魅力を最大限に生かした、地域活性化

に市を挙げて取り組んでいた姿勢が顕著に表れている。また、2005 年 5 月の富岡市長インタビューでは、具体的なまちづくりの方策として「民間活力を導入したまちづくりを展開していく。グルメ店を街中へ誘致する。これで相乗効果をねらっていきたい。おいしい物を食べに来たら製糸場があった、という考え方でも良いのでは」「まちづくりの一環として美術館を街中へ整備する。ある一定以上の作品を管理費だけいただいて、即売する。」といった形で、必ずしも製糸場ありきの地域活性化を志向していたわけではないこと、まちづくりを意識した地域活性化は志向され続けていることが読み取れる。つまり、富岡製糸場と周辺地域は、その資源を生かし、地域活性化するための方策について模索を続けていたとも言えよう。

実際に富岡製糸場以外にも上信鉄道沿線を活用した観光誘致による地域活性化を模索した事例も存在する。「銀河鉄道 999 号を走らせよう！実行委員会」が「銀河鉄道 999 号運行事業」として沿線自治体を巻き込んで企画運営したものであり、特別列車目当てに観光客を呼び込むことには成功したが、

- ①列車のみの展開でありそれ以上の地域的な広がりがなかった
  - ②版權管理会社である「東映アニメーション」からの早期終了の要請
- などの事情が重なり、大きな地域活性化の果実を得ることなく終了した経験を持っていたのである。<sup>(9)</sup>



写真 6. 銀河鉄道 999 号運行事業

#### 4.2.2. 世界遺産登録以降の地域活性化の取り組み

では、世界遺産登録以降の状況はどのようなになっているのでしょうか。2013年5月に発表された「富岡市観光戦略」によると「富岡製糸場と絹産業遺産群の世界遺産登録による波及効果を富岡市はもとより関係市町村及び本県経済に取り込むとともに、地域資源を活かした魅力ある観光地づくりを進め、リピーターの訪れる滞在型観光地の確立を目指すために、観光戦略を策定」している。世界遺産（この時点ではすでに世界遺産への登録勧告されていた。）という目に見える効果が出てきている時点で、富岡市をはじめとした地域活性化を模索する主体が大きく方針を転換し、富岡製糸場を中心とした地域活性化に大きく舵を切っている。

次に、地域活性化の指標として、前述の富岡製糸場の入場数推移を挙げる。世界遺産への暫定登録以降、2013年まで富岡製糸場の入場者数は年間20万人前後で推移してきた。しかし、2014年の世界遺産登録の前後から急激に入場者数が増え、富岡市の富岡製糸場課によると、その数は平日で3～4千人、土日なら5千人（5月の大型連休中は1万人近く）にもなるという。<sup>(10)</sup>また、富岡市を代表する産業である絹製品についても相乗効果が見て取れる。例えば、富岡シルクブランド協議会<sup>(11)</sup>によると、絹製品の出荷が堅調であり「2013年度の富岡産繭の売上額が1662万円で前年度の3倍に上った」と発表した。さらに2014年度も『「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録効果を受けて本年度はさらに繭や生糸の需要増を見込む』としている。

また、地元のシンクタンクである一般財団法人群馬経済研究所が2013年11月に行った「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産登録された場合の観光客増加に伴う経済波及効果」試算によると、

- ・観光客数：75万人（45万人の増加）
- ・経済波及効果：34億円／年 ※観光客増加分の効果
- ・主な産業別効果：サービス業13億円

交通関係7億円

商業3億円

とされている。これらの数字を現状（2014年度）の観光客数の推移予測に照らし併せて推計し直すと、

- ・観光客数：194万人（164万人の増加）
- ・経済波及効果：124億円／年 ※観光客増加分の効果
- ・主な産業別効果：サービス業33.6億円

交通関係18.1億円

商業7.7億円

上記のような経済的な波及効果を生み出すと試算し直しことが可能である。富岡市の2014年度の一般会計予算規模はおおよそ176億円であるから、この経済波及効果の124億円という数字が、富岡市にとっていかにインパクトの大きい数字かということは、想像に難くない。

このように世界遺産の登録を受けて、様々な形で地域活性化に寄与する事象が表れ始めていると言える。

#### 4.3. 世界遺産登録以降のマイナスのインパクトについて

前述までの通り、世界遺産への登録によって起こされているプラスのインパクトは、かなり大きい規模で富岡製糸場周辺にもたらされているということが言えよう。一方で、その陰で起こっているマイナスのインパクトについて、積極的な議論が成されているとは言い難い。本稿では、以降それらマイナスのインパクトについて言及していきたい。

主なマイナスのインパクトは以下に挙げる点である。

- ① 来場見込者数を大幅に上回るため駐車場などの観光インフラの未整備とそれに伴う周辺交通環境の悪化
- ② 観光客の大量流入による地域景観保全コスト（人件費含）の増大
- ③ 滞在型観光を志向したが、首都圏からの観光は日帰りが中心で周辺の温泉地への波及効果は限定的

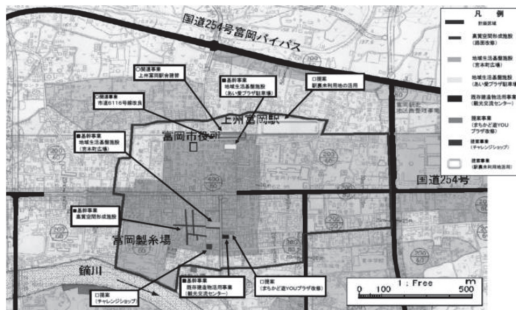


#### ④ 施設自体の維持管理コストの増大に伴う負担の増大

これらのマイナスのインパクトに対して地域がどのような取り組みを行っているか検証する。

##### 4.3.1. 来場見込者数を大幅に上回るため駐車場などの観光インフラの未整備とそれに伴う周辺交通環境の悪化

富岡市から2012年3月に発表されている「都市再生整備計画」を基に検証していきたい。



出典：富岡市「都市再生整備計画」2014/3

図7. 富岡中央地区の都市再生整備計画

富岡製糸場は富岡市の中央地区に位置しており、この都市再生整備計画の対象地域と重なり合っている。これらの計画を見てもわかるように富岡市では、「中心市街地活性化（歴史遺産に集うにぎわいと交流のまちづくり）」を掲げて、製糸場観光に訪れた観光客に対する「分かりやすい案内やおもてなしの向上」に主軸をおいている。地域活性化の観点から見て、これらの取り組みは有効かつ必要な取り組みだとは考えられるが、現状の富岡製糸場への来訪者数を勘案した場合、この観点よりも優先されるべき事柄、すなわち観光インフラの整備に早急に取り組む必要があると考える。実際、富岡製糸場に休日に自家用車で訪れた際にも駐車場の確保でかなりの時間を費やすことになる経験をした。一過性のブームによる集客を目指すのではなく、「おもてなしの向上」による継続的な来訪を市として計画しているのであれば、カスタマーエクスペリエンス<sup>(12)</sup>を重視する観点からも基本的なインフラ整備に大きく力を注ぐべきであると考ええる。

また、これらの計画が2年前の見通しを基に建てられていることにも言及したい。今までの検討でもわかるように、富岡製糸場が起こしたインパクトは誰もが予想しえなかったほどの大規模なものであった。中心地区への来訪者を2014年には43万人程度と見積もったこのような甘い計画は、早急に見直されるべきであろうし、観光を軸に地域活性化をしていこうという狙いが富岡市にはあるはずである。顧客の満足感を充足し「来てよかった」「もう一度訪れたい」という気持ちを醸成しなければ、富岡製糸場を活用した地域活性化も下火となっていく危険性を持っていることを認識すべきである。

富岡製糸場に来訪しているメディアによってもたらされた観光客は、メディアからの情報を摂取することによって行動している人々である。したがって、彼らを取り巻くメディアにマイナスの情報が出せば、それらは一瞬にして広がり、取り返しのつかない事態を招く危険性をはらんでいることに十分留意する必要がある。

##### 4.3.2. 観光客の大量流入による地域景観保全コスト（人件費含）の増大

前述の整備計画にもあるように富岡製糸場とその周辺地域は大規模なインフラ整備を計画している。また、この計画内には、世界遺産登録を前提とした緩衝地帯（バッファゾーン）<sup>(13)</sup> に関しても盛り込まれている。周辺環境がバッファゾーンとして適切に保護されていることが世界遺産登録の要件として求められ、富岡製糸場を背景に形成された街並みや歴史性のある街道を保全していく必要がある。そのため、富岡市は富岡製糸場の世界遺産登録とその維持を見据え、これらの歴史的な町割りや街並み、文化的な資源を保全し活用したまちづくりを推進する必要性がある。

こうした取り組みは世界遺産登録を達成するために必ず必要なものであるが、当然のように開発の自由も聞かなくなり、開発コストも通常よりかかる形となる。そして、その負担は、当然地域住民の税金をはじめとした様々な犠牲の上に成り立つものであり、この様な世界遺産の登録維持管理

にかかるコストによって、通常の地域住民の生活にかかる行政サービスに支障をきたす可能性は否定できない。

これらの観点に対して、富岡市の一般会計予算を見る限りでは配慮されている様子はなく、今後注視してみていく必要があると言えよう。

#### 4.3.3. 滞在型観光を志向したが、首都圏からの観光は日帰りが中心で周辺の温泉地への波及効果は限定的

群馬県中小企業団体中央会のレポート（2014年7月）によると「群馬県内の温泉旅館は、富岡製糸場の世界遺産登録効果による宿泊客増は見られず昨年並みに推移」していると報告されている。富岡製糸場をはじめとする世界遺産群と群馬県の誇る伊香保などの温泉地は同じ県内に属しているが、距離的にも離れており誘客という部分において苦戦を強いられているのが現状である。また、富岡製糸場は車で来訪した場合、藤岡ジャンクションから上信越道へと入るため、関越道沿線の群馬県の温泉地へのアクセスが必ずしも良好とは言えない。

さらに、首都圏からのアクセスの観点で見ると高速道路により2時間ほどでアクセス可能なため、どうしても日帰りでの観光がメインとなってしまう、「ついで」の観光という視点での広がりには薄くなると言わざるを得ない。

こうした状況を踏まえ、群馬県ならびに各温泉地は誘客に向けて、必死のアピールを続けているが、なかなか実績に繋がっていないというのが現状である。

#### 4.3.4. 施設自体の維持管理コストの増大に伴う負担の増大

世界遺産の登録要件は厳格であり、未来にわたって構成要件が保全されない場合は、登録取り消しという厳しい事態も十分想定される。したがって、これらを維持管理するコストは一説には100億円はかかるとされている。こうした背景を踏まえ、2014年10月23日の報道でもあったように保全維持管理を目的とした協力金500円程度を来

場者から徴収する方針を固めたようである。従来の入場料金500円のおよそ半分程度を保全のために積立ててきたのに加えて、500円を新たに積み立てていく形になるが、入場料金が1000円を超えた場合の来場客数の変化について注視していく必要がある。

また、来場者に負担の分担を依頼するだけでなく地域として負担をどうカバーしていくのか、市や県の財政とのバランスをいかに取っていくか、老朽化が進む建物の維持管理、安全性の確保の観点からも今後も十分な対応がされるべきであろう。

## 5. まとめ

富岡製糸場とその周辺では世界遺産登録され、情報がメディアに載った2014年に、前述の課題が情報メディアリード型で引き起こされた「一瞬の内の地域活性化」によって一気に顕在したのである。世界遺産への登録となれば、情報メディアによる取材・報道などが過熱し、その情報の多くは首都圏地域を中心に生活者に対して届けられることは容易に想像できたはずである。2007年1月の世界遺産暫定リスト入りから、地域では様々な準備を官民挙げて行ってきたが、そのマイナスのインパクトは想像を遥かに超える課題を突き付ける結果となったと言えよう。

富岡製糸場とその周辺地域は今後これらの課題を一つ一つクリアしていかなければならない。しかし、一度花開いた地域を運用して行きながら、一方で課題を解決していくことはかなりの困難を要すると言える。それは、富岡製糸場とその周辺地域自体が現状のスケールでの観光客流入に対して不慣れであり、まずはその対応を優先させると課題の方がおろそかになってしまう可能性が高いためである。

このようにマイナスのインパクトは情報メディアリード型の地域活性化は「爆発力」と「破壊力」を兼ね備えているため、この手法での地域活性化を目指し、多くの果実を得ようとするのであれば、必ずマイナスのインパクトに関連する部分の抽出と対応策を事前に想定し、動いておくことが肝要



であろう。こうした情報メディアの力を的確に把握し、活用コントロールできるメディアコントローラーであり、その影響を受け入れられる準備まで差配できるプロデューサー的な人材こそが、今後地域活性化に求められる人物像ではないだろうか。

### 《注》

- (1) 構成資産「富岡製糸場」「田島弥平旧宅」「高山社跡」「荒船風穴」の4か所
  - (2) 1972年の第17回 UNESCO 総会で採択された世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約の中で定義された基準を満たし、各種申請および審査を経て登録される。2013年11月現在、世界遺産は981件（文化遺産759件、自然遺産193件、複合遺産29件）、条約締約国は190カ国。文化遺産は、顕著な普遍的価値を有する記念物、建造物群、遺跡、文化的景観など。自然遺産は、顕著な普遍的価値を有する地形や地質、生態系、絶滅のおそれのある動植物の生息・生育地など。複合遺産は文化遺産と自然遺産の両方の価値を兼ね備えているものを指す。登録要件として、「世界遺産条約履行のための作業指針」で示されている下記の登録基準のいずれか1つ以上に合致するとともに、Authenticity・Integrityの条件を満たし、前述の条約を締約した国の国内法によって、適切な保護管理体制がとられていることが必要。  
【世界遺産の登録基準】
    - (i) 人間の創造的才能を表す傑作である。
    - (ii) 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値感の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。
    - (iii) 現存するか消滅しているにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。
    - (iv) 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。
    - (v) あるひとつの文化（または複数の文化）を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である（特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの）
    - (vi) 顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。
    - (vii) 最上級の自然現象、又は、類まれな自然美・美的価値を有する地域を包含する。
    - (viii) 生命進化の記録や、地形形成における重要な進行中の地質学的過程、あるいは重要な地形学的又は自然地理学的特徴といった、地球の歴史の主要な段階を代表する顕著な見本である。
  - (ix) 陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展において、重要な進行中の生態学的過程又は生物学的過程を代表する顕著な見本である。
  - (x) 学術上又は保全上顕著な普遍的価値を有する絶滅のおそれのある種の生息地など、生物多様性の生息域内保全にとって最も重要な自然の生息地を包含する。
- に登録基準(i)～(vi)で登録された物件は文化遺産、(vii)～(x)で登録された物件は自然遺産、文化遺産と自然遺産の両方の基準で登録されたものは複合遺産となる。
- (3) 群馬県南西部に位置。人口は約50,000人。主な産業は農業、精密機械工業。2006年に近隣の妙義町と富岡市が合併し、以降も富岡市として市政を運営。
  - (4) 中央官庁関連では国土交通省、経済産業省、首相官邸での動きが活発。特に首相官邸は観光立国懇談会の報告書を受け、観光立国関係閣僚会議を開催し、観光立国実現のための施策の効果的かつ総合的な推進を図っている。
  - (5) NYタイムズが2014年に実施した調査によると「人はなぜシェアしたいのか」の主な理由は以下の3点に集約されとしている。
    - ①他人に教えたい。  
94%が価値のあるコンテンツ、面白いと思うコンテンツを他人に紹介したいと回答。
    - ②自分を表現したい。  
84%が自分を表現するためにコンテンツをシェアしていると回答。
    - ③友人との関係性を維持したい。  
78%が友人との関係を維持するためにコンテンツをシェアしていると回答。
 また、Berger(2013)は、シェアされるコンテンツは、以下に挙げる6つの特徴のどれかを有しているとしている。
    - ①自分が特別であると感じさせる。
    - ②感情に訴える。
    - ③有益である。
    - ④人の目に触れる。
    - ⑤鍵刺激により思い出させる。
    - ⑥ストーリーがある。
  - (6) [10] 田畑 (2013) pp.89
  - (7) 群馬県が開催した「第1回富岡製糸場世界遺産伝道師養成講座」の修了者により、2004年8月30日に設立された世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」の価値の普及・啓発活動を行っているボランティア団体。2014年7月現在、269名の伝道師が活動。
  - (8) 地域資源を活かした持続可能なまちを目指して2006年3月に策定。
  - (9) [10] 田畑 (2013) pp.89
  - (10) 2014年5月7日毎日新聞報道
  - (11) 2008年5月7日設立。国が新たに導入した蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業を活用しながら、養蚕農家から絹加工業者・販売業者まで、蚕糸・絹業に携わる関係者がグループを形成し、生産から流通・小売までの連携を強化し、質が良く売れる絹製品の開発・販売に取り組む。
  - (12) 「顧客は商品を購入するだけではなく、商品を購入する経験を得ている。つまり、安く買えるという経験、新しい商品を知るといった経験など、顧客が体験するさ

まざまな経験を価値とする。」[1] Schmitt (1999)

- (13) 「世界遺産条約履行のための作業指針」によると「緩衝地帯は、推薦資産の効果的な保護を目的として、推薦資産を取り囲む地域に、法的又は慣習的手法により補完的な利用・開発規制を敷くことにより設けられるもうひとつの保護の網である。推薦資産の直接のセッティング、重要な景色やその他資産の保護を支える重要な機能をもつ地域又は特性が含まれるべきである。緩衝地帯を成す範囲は、個々に適切なメカニズムによって決定されるべきである。登録推薦の際には、緩衝地帯の大きさ、特性及び緩衝地帯で許可される用途についての詳細及び資産と緩衝地帯の正確な境界を示す地図を提出すること。」とされている。

#### 引用・参考文献

- [1] Bernd H. Schmitt, "Experiential Marketing: How to Get Customers to Sense, Feel, Think, Act, Relate", Free Press, 1999
- [2] Jonah Berger, "Contagious: Why Things Catch On", Simon & Schuster, 2013
- [3] The New York Times CUSTOMER INSIGHT GROUP, "WHY DO PEOPLE SHARE ONLINE?", The New York Times, 2014
- [4] 岩崎達也, AD STUDIES Vol.45 2013 pp.10-15, 『マスコミ広告はどこに向かうのか』, 電通, 2013年8月
- [5] 川村秀憲, 開発こうほう '11.12 『ソーシャルメディアと観光振興』, 一般財団法人北海道開発協会, 2011年12月
- [6] 群馬県富岡市, 『富岡市まちづくり計画』, 2006年3月
- [7] 群馬県富岡市, 『都市再生整備計画 富岡中央地区』, 2012年3月
- [8] 島根県大田市, 『平成18年度 電源地域振興指導事業に係る「電源地域振興計画策定調査(島根県大田市)」報告書』, 2007年3月
- [9] 鈴木晃志郎, 日本観光研究学会第24回全国大会論文集 pp.85-88 『メディア誘発型観光の研究動向と課題』, 日本観光研究学会, 2009年11月
- [10] 田畑恒平, 『著名なキャラクター活用での地域活性化における知的財産分野での課題について』, 地域活性研究 Vol.4, pp.85-93, 地域活性学会, 2013年3月
- [11] 松下均, 『「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産登録された場合の経済波及効果について』, 一般財団法人群馬経済研究所, 2013年11月
- [12] 山田雄一他, 『観光まちづくりのマーケティング』, 学芸出版社, 2010年11月
- [WEBサイト]  
群馬県 <<http://www.pref.gunma.jp>>  
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟  
<<http://www.unesco.or.jp/>>  
富岡市 <<http://www.city.tomioka.lg.jp/>>  
富岡シルクブランド協議会  
<<http://tomioka-silkbrand.jp/>>

本稿で参考にしたWebサイトの最終訪問日は、2014年10月20日である